

図書館「マルチルーム2」と連動した初年次教育

——和歌山大学経済学部・基礎演習におけるアクティブラーニングの取組事例——

金川めぐみ, 岡田真理子

近年, アクティブラーニング(Active Learning)と称される学生の能動的な学習を取り込んだ授業形式が注目される¹⁾。例えば, 河合塾が2009年に実施した「全国大学初年次教育調査」では, 初年次教育に求められる点として①高校までの命題知の暗記型の学習から, 大学で求められる実践知・活用知への学びの転換, ②そうした転換をもたらす初年次学習をすべての学生に一定レベルで保証していること, ③学生が自律的にPDCA(計画・実行・評価・改善)サイクルを回していけるように自律・自立化を促していること, を指摘する²⁾。

和歌山大学経済学部においても, 初年次教育として, 1年次前期に「基礎演習Ⅰ」を, そして1年次後期に「基礎演習Ⅱ」という科目を設定している。この科目では, 特に上記①および②の点について全ての経済学部生にこれを保障することを意識し, 各教員が演習型の授業を実施している³⁾。

このように実践知・活用知への習得の転換が学生にとって重要な要素であることは推察されようが, 大半の教員は, 授業の過程においていかなる方法でアクティブラーニングを進めていくのか, という点について試行錯誤を繰り返しているところだろう。

そこで本稿では, 初年次教育におけるアクティブラーニングの効果的な実施方法として, 図書館マルチルームと連動した授業実施について紹介を行う。和歌山大学附属図書館では, 図書館を単に書籍や文献を検索する場所のみならず, 学生や教職員が集う「知識・情報・発想」の場として積極的に展開をしている。改装工事がなされた新しい図書館では, 教育学部の音楽専攻の学生が定期演奏会を開く「ライブラリー・コンサート」が実施され, 学生が入館しやすい雰囲気を作り出している。また, 情報収集・発想支援という点では, 図書館3F

-
- 1) アクティブラーニングであるが, 本稿では一応「学生の能動的な学習を取り組んだ授業を総称する用語」と定義しておく。
 - 2) 河合塾編『初年次教育でなぜ学生が成長するのか 全国調査からみえてきたこと』東信堂, 2010年, はじめに。
 - 3) たとえば, 和歌山大学経済学部における2014年度の基礎演習Ⅰシラバスでは, その到達目標として, 「大学生としての最低限の, 他者とのコミュニケーション能力, 読み書き能力, 資料収集・分析能力, 発表(プレゼンテーション)能力, 議論(ディスカッション)能力を身につけることと, 経済学部の学生として, 人文社会的な諸問題に積極的に関わっていけることです。」と①および②の命題を意識した到達目標を設定し, 具体的な到達目標をシラバス中に提示している。なお, 基礎演習Ⅱは, 基礎演習Ⅰの発展系として位置づけるが, 社会科学の新書1冊ないし2冊を分析的に読むことにより, 学生の分析能力・読み書き能力・議論能力を総合的に高めることを主眼としている。ちなみに③のサイクルについては, 経済学部ではかねてより「私の学びのデザインシート」というWeb上で蓄積できる自己の学びの振り返りの記録を採用しており, これにより学生の学びの自律・自立化を図ろうとしている。

クロスカル情報室に、学生の「Writing, Reading」指導を行う部屋が設定されている。また図書館2Fレファレンスコーナーでは専門教員が常駐し、授業課題等で生じた調べ物を学生が主体的に実施できるよう、支援を行っている。

このような意味で、従来から比べると各段に、本学の図書館は、学生により近く、使いやすいものへと変化を遂げている。そして2013年度より、図書館3Fに「マルチルーム2」という部屋ができ、本格的に授業で利用されている。

このマルチルームは、簡単にいうと「部屋の4方の壁のうち2面が全面ホワイトボード」であり、折りたたみ机付きの椅子が20脚程度置いてあるスペースである⁴⁾。後述の基礎演習での利用例からも明らかとなっており、壁全面がホワイトボードであることから、グループ学習におけるブレインストーミングなどの作業で、どこまでもホワイトボードマーカーを利用してアイデアを記載することが物理的に可能となっている。学生の自由な発想を支援し、その発想を生かした学びを進めるために効果的な部屋のつくりになっていることがわかる〔写真1〕。



写真1：和歌山大学附属図書館マルチルーム2

後述する【1】では、和歌山大学経済学部の金川が担当した2013年度の「基礎演習Ⅰ」における、図書館マルチルーム2を利用した実際の授業例を紹介する⁵⁾。【2】では同様に、和歌山大学経済学部の岡田が担当した「基礎演習Ⅱ」における図書館マルチルーム2を利用した実際の授業例を紹介する。なお、2013年度に基礎演習を担当した岡田と金川は、本学で設置されている「教育改革プロジェクト」メンバーの一員であり、この基礎演習の授業展開に関しても、授業コンテンツにつき情報共有を行っている。【3】では、この2つの授業科目の試みにおける現時点での長所や課題について述べることにする。

4) その詳細については、岡田大輔〔2014〕「学生が問いをつくる方法の検討―壁全面ホワイトボードとブラウザ上を比較して―」『2014 PCカンファレンス論文集』, 78-81頁, を参照いただきたい。

<http://gakkai.univcoop.or.jp/pcc/2014/papers/pdf/pcc091.pdf>

5) なお、主に2013年度に実施した「基礎演習Ⅰ」における図書館「マルチルーム2」と連動した部分について記述するが、その後授業に改良を加えており、2014年度に金川が担当する「基礎演習Ⅰ」でもさらに新しい試みを行っている。そのため内容は一部、2014年度に実施したものも含めて報告することとする。

【1】和歌山大学経済学部「基礎演習Ⅰ」における「マルチルーム2」の利用例

1) 和歌山大学経済学部「基礎演習Ⅰ」の授業概要

和歌山大学経済学部では、経済学部の初年次教育として、前期に「基礎演習Ⅰ」という演習型の講義を開講している。この授業のシラバスは、学部教務委員会により一定の雛型が示されている。教員は、その雛型にアレンジを加え、実際に授業を展開する。

なお2013年度において金川が作成した「基礎演習Ⅰ」の授業計画は、〔資料1〕の通りである⁶⁾。

資料1：2013年度 和歌山大学経済学部「基礎演習Ⅰ」（金川担当）の授業計画

| 回 | 内 容 | 実施場所 |
|----|----------------------------|--------------|
| 1 | オリエンテーションと学内案内 | 経済学部教室 |
| 2 | 自己紹介（報告1） | 経済学部教室 |
| 3 | 自己紹介（報告2） | 経済学部教室 |
| 4 | 新聞や記事や文献などを通じて、問題に触れる1 | 図書館1F雑誌コーナー |
| 5 | 新聞や記事や文献などを通じて、問題に触れる2 | 経済学部教室 |
| 6 | 理解・分析した結果を他人に文章で知らせる1 | 経済学部教室 |
| 7 | 問題について、利用できる文献や資料を理解・分析する1 | 図書館3Fマルチルーム2 |
| 8 | 問題について、利用できる文献や資料を理解・分析する2 | 図書館3Fマルチルーム2 |
| 9 | 問題について、利用できる文献や資料を理解・分析する3 | 図書館3Fマルチルーム2 |
| 10 | 問題について、利用できる文献や資料を調査する | 図書館1F検索コーナー |
| 11 | 少人数班による調査・議論1 | 図書館3Fマルチルーム2 |
| 12 | 少人数班による調査・議論2 | 図書館3Fマルチルーム2 |
| 13 | 少人数班による調査・議論3 | 図書館3Fマルチルーム2 |
| 14 | 少人数班による報告、ふりかえり | 図書館3Fマルチルーム2 |
| 15 | 少人数班による報告、ふりかえり | 図書館3Fマルチルーム2 |

2) 「基礎演習Ⅰ」における図書館の利用状況

表1をみて明らかな通り、「基礎演習Ⅰ」の最初の数回の授業は、経済学部の通常教室で実施している。図書館を利用したのは、第4回、第7回～15回の計10回であり、15回の講義のうち2/3を、図書館を利用した授業構成とした。

6) 和歌山大学HPのシラバス検索から、2014年度の「基礎演習Ⅰ」のシラバスを閲覧することが可能である。表1では実際の進捗状況を踏まえたものにアレンジしてあるので、HP上の進捗状況とは若干のずれがあることを付記しておく。

このうち第4回は、学生に図書館に慣れてもらうことも兼ねて、指定した経済雑誌がどこにあるか図書館内を探索させ、学生自身が任意で選んだ経済雑誌記事を読み、300字程度で内容を要約させるという作業を行った。また第10回では、図書館1Fにあるパソコンが複数台設置されているコーナーを利用し、少人数班での班報告を行うための情報収集⁷⁾を実施させた。本稿の内容である図書館「マルチルーム2」を実際に利用したのは、第7～第9回、第11～第15回の計8回である。

3) 図書館「マルチルーム2」を利用した実際例

①「全面ホワイトボード」に慣れさせる。

図書館マルチルーム2に入った学生は、まずその部屋の構造に驚く。こちらとしては、このマルチルームを利用して、自由な発想のもと、このホワイトボード一杯にアイデアを書きこんでもらいたいところである。だが実際には、ホワイトボードマーカーを渡し「じゃあ自由に書いてごらん」といっても、たいていペンを手に取ったままもじもじするか、ホワイトボードに向かったまま固まってしまうことが多い。この意味で、まずは「全面ホワイトボード」という環境に、学生を慣れさせる作業が必要になる。

2013年度の基礎演習Iでは、担当者側でこの点の配慮が十分いきとどかなかったが、2014年度の基礎演習Iでは前年度の反省を生かして、学生に「大学生の本分」というキーワードをテーマに、①思いつくことをグループでどんどん書きだしてもらい、②出したキーワードに対して「疑問文」を出すという作業を行った〔写真2〕。この作業は4名1組で行い、皆でホワイトボードマーカーをもって、一定時間で書きだしてもらおう。

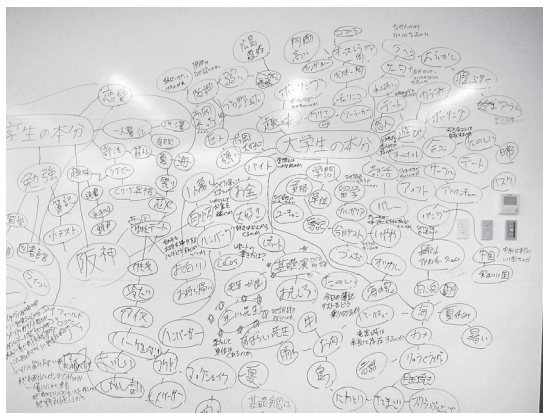


写真2：「大学生の本分」ワーク

入学して1-2カ月頃で、学生は大学生活に対する思い希望がたくさんある。どんどんその内容を書きだすことで、学生もホワイトボードに書くということが楽しくなってくる様子が見受けられた。我先にと、どんどん発想を伸ばしていく学生もみられる。出来上がりをグループ内でコメントさせるのも、効果的である。できあがったものをスマホで撮影し、こんなものができたと喜んで教室を出ていく様子がみられた。

7) 少人数の班による班報告テーマを定めさせた後に、OPAC、日経テレコン21、Cinii等の文献・雑誌記事情報検索ツールを利用し、目的の情報を検索させた。

学生側にとってこの作業は、ホワイトボードに自由にアイデアを書いていく楽しさと、班で取り組むことで他の学生と仲良くなり、その人を知るといった要素を持っている。また教員側にとっては、自分で発想することに慣れさせるとともに、②の疑問文を出すという作業を行うことにより、問題発見型の授業展開を行いやすくする下地作業となる。

②新聞記事と壁のホワイトボードを利用して、班報告の題材を検討させる。

第7～第9回の講義において、事前に学生に、自らが興味を持った新聞記事を1つ選択し、内容要約と意見を記載したレジュメを持参するよう指示した。各授業の冒頭10分間で、持ち寄った新聞記事のテーマをグループ内で報告させ、「班報告で扱いたい新聞記事」を1つ選択させた。

その後、壁面ホワイトボードを用い、その新聞記事の中心キーワードから発想する内容を自由に記載してもらい、アイデア出しを行った〔写真3〕。最終的には、アイデアをもとに、社会科学的に問題となるテーマを選択させ、調べるべきことを確定させる作業を3回繰り返して実施した。

なお、アイデアを具体的な作業にまとめる手法としては、2013年度より、日本図書協会図書館利用教育委員会・図書館利用教育ハンドブック学校図書館（高等学校）版作業部会編〔2011〕における、高等学校での探究学習を行う際の問題設定の手法を参考にした⁸⁾。具体的には、この文献における「ワークシート3：キーワードひらめきシート」（30頁）、「ワークシート4：イメージマップ」（36頁）、「ワークシート5：イメージマップから疑問文をつ



写真3：新聞記事を使っでの
アイデア出し

8) なお本書は、都留文科大などの多くの大学における初年次教育で活用されている。

http://toisupa.blogspot.jp/2011/07/blog-post_2633.html

本来ならば、高等学校の探究学習用の教材を援用する点は、大学教育として課題があるといえるかもしれない。だが実際には、筆者が担当した基礎演習Ⅰ受講生に、高校まででこのような形の「自分たちで問いを設定し、課題をつきつめ、問題化し、解決方法を含めて考える」タイプの学習の経験があるかどうか聞くと、「ない」と答えた場合が圧倒的に多かった。そのためある意味、基礎演習では、高校で意識して行わずの探究学習の不足を補っている部分が多い。

くるワークシート」(42頁)の作業を、[写真3]のように壁面のホワイトボードを使って行わせる。さらに、具体的な問題設定を行う作業として「ワークシート6：問いをとりあえず決めるチェックシート」(50頁)、「ワークシート7：問いに選んだ理由・考え」のシートを各班(4人1組)に配布し、各回の授業終了時まで書きこんでもらう⁹⁾。「ワークシート7」まで完成したら、その回の授業の作業は終了するという形で、各班でホワイトボードに出たアイデアを具体化するという形をとった。「ワークシート7」では、①ワークシート6で選んだ問い、②問いを選んだ理由、問いに対する考え、③気になっていること、を書きこむ。つまり、1枚の新聞記事を題材に、何ら問題点を発見して、これに対しての気づきや疑問点を書きこませるという作業を1回の授業の中で実施する。

3回これを繰り返し、2013年度・2014年度に出てきたテーマは、[資料2][資料3]の通りである。受講生にとって、新聞記事をいい加減な気持ちで選択するのではなく、「何が社会科学の問題として扱うべき課題なのか」を意識しながら、新聞を読み込むという作業につながったようである。

資料2：2013年度の「基礎演習Ⅰ」（金川担当）での班ごとのテーマ設定リスト

➤A班

- ・吉野家が一時期牛井しか出さなくなったのはなぜなのか？
- ・ファストファッションは、なぜ色、デザインが豊富なのに安いのか？
- ☆なぜ富士山は“文化遺産”なのか？

➤B班

- ・なぜ無料のSNSが多いのか？
- ☆自然エネルギーの単価は？
- ・女性の管理職が少ないのはなぜか？

➤C班

- ・裁判の形態として裁判員制度は本当に正しいのか？
- ・学校側は本当にいじめを認識できていないのか？
- ☆育児休暇の海外との差はどんなものか？

➤D班

- ・なぜ晩婚化が進むのか？
- ☆なぜスマートフォンでは、アプリを無料で提供できるのか？
- ・外国のいじめは？

* 3つのテーマの中から、班報告をするべき課題を1つに絞った。最終的なテーマには、冒頭に☆印を付している。

9) なお、日本図書協会図書館利用教育委員会・図書館利用教育ハンドブック学校図書館（高等学校）版作業部会編〔2011〕では、探究学習のために、「ワークシート1」～「ワークシート12」までの全部で12種類のワークシートが用意されているが、今回の基礎演習Ⅰでは、そのうちの一部のワークシートのみを利用し演習を行った。

資料3：2014年度の「基礎演習Ⅰ」（金川担当）での班ごとのテーマ設定リスト

➤ 1班

☆なぜパンケーキが流行ったのか？

- ・どうしたらゴミが減るか（富士山の観光客）
- ・なぜお札は紙なのか（日本）

➤ 2班

・アニメ化による収入の増加は？

☆ゆるキャラの興業収入は？

- ・お札になる人の基準は何か？

➤ 3班

☆どうしたら英語を上手に話せるようになるのか？

- ・修学旅行で人気の都道府県は？
- ・W杯が与える経済効果は？

➤ 4班

・USJはどうすれば増益するのか？

・はだしのゲンと図書館問題について

☆日本の教育制度はどうなっているのか？

➤ 5班

☆消費税を引き上げる必要はあったのか？

- ・精神的苦痛を受けているのになぜ周りの人に相談しないのか？
- ・定年退職は60歳でいいのか。

* 3つのテーマの中から、班報告をするべき課題を1つに絞った。最終的なテーマには、冒頭に☆印を付している。

③壁のホワイトボードを利用して、班報告で調べる内容をリストアップさせる。

「ワークシート7」の段階では、班報告で扱うべきテーマが大枠で決定しただけなので、それをさらにつきつめて、人前で報告するに耐える内容にブラッシュアップしていくのが、次の班学習の作業である。

そのための手法として、日本図書協会図書館利用教育委員会・図書館利用教育ハンドブック学校図書館（高等学校）版作業部会編〔2011〕における「ワークシート8：問いを5W2Hに分けるためのシート（60頁）」を使い、ホワイトボードに大きな模造紙を貼り、各班で設定した最終的な問いを中心として、それをさらに細かく「what?」「why?」「where?」「when?」「who?」「how?」「how much?」「other」の8項目につき問いを分解し、リストアップを行った〔写真4〕。これは、班報告での問題設定をじっくり眺めて、その答えを探すために自分たちが調べなければいけないことを視覚的に確認させる効果を持つ。出てきた調べなければいけない「問い」は、班によっては30個以上も出てくるが、ホワイトボードにそれを貼りだすことにより、優先順位をどのように付けつつ、限られた時間でどのような項目を調べるべきか

についての議論が、班の仲間で自然と起こってくる。自分たちの班報告のためには、何を調べるべきかが、壁面のホワイトボードによってうまく可視化できるという点で、学生の自主的な問題発見を行う契機にもなっているように感じる。

教員がときおり様子を見つつ、班報告で調べるべき内容とそれを報告するための班報告のストーリーを検討させ、第11～第13回の3回は、図書館での情報検索も踏まえて、各班が班報告の準備を行った。

④班報告と振り返り

第14回・第15回の2回で、班報告とその振り返りを行わせる。班報告に

ついては、マルチルームの壁面ホワイトボードを利用して、パワーポイントをそこに映し出すことによって実施した。2013年度の基礎演習Ⅰでは4班（1班4名）が各20分報告¹⁰⁾、質疑応答10分、プレゼンテーション評価シートによる振り返りが5分の時間構成とした。班報告におけるプレゼンテーション評価シートは、学習技術研究会〔2006〕で掲載されている「プレゼンテーション評価シート」にアレンジを加えたものである〔資料4〕。この評価シートにより自己・他者評価を実施する。

この評価シートは、第11回の授業内で、学生に周知している。このことにより、各班でよりよい発表を行おうと、評価項目にしたがい、授業時間外に班で自主的に報告準備をする姿がみられた。また、評価シートについては、項目ごとに集計し、自由記述欄については無記名で学生に開示をしている。評価結果をみて、基礎演習Ⅱで同様な報告があったときは、基礎演習Ⅰで指摘された点を改善しさらに頑張ろうという気持ちになっている学生もみられた。

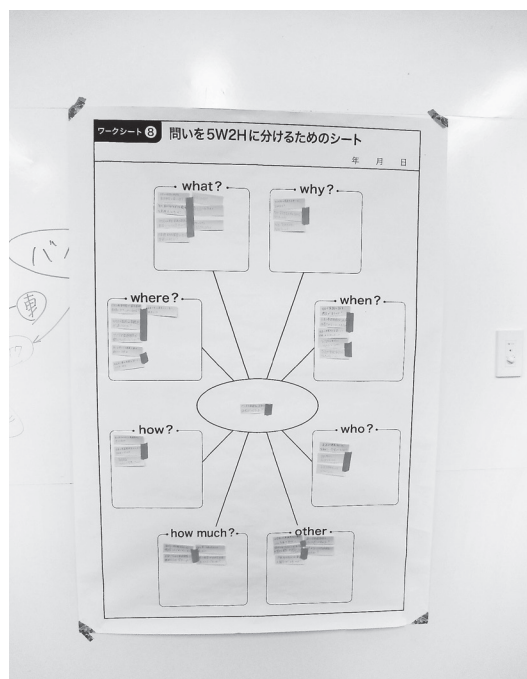


写真4：問いの分解

10) 2014年度の基礎演習Ⅰについては、2013年度より人数が増えたため5班（1班4名）が、各15分報告することとした。

資料4：2014年度の「基礎演習Ⅰ」（金川担当）のプレゼンテーション評価シート

基礎演習Ⅰ（金川）

日時： 2014 年 ____ 月 ____ 日

●プレゼンテーション評価シート●

| | |
|---|-----|
| 班 | 氏名： |
|---|-----|

①聞いている班 → 1)それぞれの項目について評価してみましょう。

評価には以下の記号を使用してください。

◎大変良い、○良い、△ふつう、×もう少し。

2)発表を聞いて気づいたことなどを自由に書いてみましょう。

②発表班 → 自分たちの発表を自己評価してみましょう。

| 大項目 | 小項目 | 評価項目 | 評価 |
|------|-----|-----------------------------|--------|
| | | | ____ 班 |
| 話し方 | | 大きな声が出ているか。 | |
| | | 言葉がはっきりと聞き取れるか。 | |
| | | 聞いている人たちの方を見ているか。 | |
| 内容 | 課題 | 社会的に興味関心があるものとなっているか。 | |
| | | 課題設定は適切(回答可能な課題か)であるか。 | |
| | 主張 | 課題と主張は整合性があるか。 | |
| | 根拠 | 根拠は説得的であるか。 | |
| レジュメ | | 資料、文献、データなどが明確で具体例が示されているか。 | |
| | | 参考文献やHPがきちんと明記してあるか。 | |
| | | 図、表、グラフが効果的に使われているか。 | |

_____ 班さんの発表で気づいたこと、自分の発表に役立てたいこと。

【2】和歌山大学経済学部「基礎演習Ⅱ」における「マルチルーム2」の利用例

1）和歌山大学経済学部「基礎演習Ⅱ」の授業概要

和歌山大学経済学部では、経済学部の初年次教育として、前期の「基礎演習Ⅰ」に続いて後期に「基礎演習Ⅱ」という演習型の講義を開講している。この授業のシラバスは「基礎演習Ⅰ」と同様に教務委員会により一定程度の難型が示されている。「基礎演習Ⅱ」の主な教育目的は、和歌山大学経済学部における2年次の授業科目「基本文献研究」や3年次以降の専門演習（いわゆるゼミナール）に対応するため、演習科目における学習方法に関する基礎的能力を「新書程度の文献を1冊以上」読むことで身に付けさせるというものである。この教育目的に沿って、教務委員会による難型には「新書程度の文献を15回の授業で1冊読む」パターンと「新書程度の文献を15回の授業で2冊読む」パターンの2パターンが用意されている。「基礎演習Ⅱ」担当の教員は2パターンいずれかを選択し、さらに取り上げる文献を選定してシラバスを決定する。

2013年度における岡田が作成したシラバスは新書を1冊読むパターンのシラバスである。文献には、暉岡淑子著の『社会人の生き方』（岩波新書 赤 1388, 2012年）を選定した。なお、岡田が作成した「基礎演習Ⅱ」の授業の進捗状況は資料5の通りである¹¹⁾。

資料5：2013年度 和歌山大学経済学部「基礎演習Ⅱ」（岡田担当）の授業計画

| 回 | 内 容 | 実施場所 |
|----|------------------------|--------------|
| 1 | ガイダンス、ウォーミングアップ | 図書館3Fマルチルーム2 |
| 2 | 自己紹介（キーワード抽出） | 図書館3Fマルチルーム2 |
| 3 | コミュニケーションの基礎① 傾聴 | 図書館3Fマルチルーム2 |
| 4 | コミュニケーションの基礎② 傾聴の復習と質問 | 図書館3Fマルチルーム2 |
| 5 | コミュニケーションの基礎③ 質問 | 図書館3Fマルチルーム2 |
| 6 | 教科書の検討の練習 | 経済学部教室 |
| 7 | 教科書の検討（第1章） | 経済学部教室 |
| 8 | 教科書の検討（第2章） | 経済学部教室 |
| 9 | 教科書の検討（第3章） | 経済学部教室 |
| 10 | 教科書の検討（第4章） | 経済学部教室 |
| 11 | 教科書の検討（第5章） | 経済学部教室 |
| 12 | 論点整理 | 経済学部教室 |
| 13 | 書評検討会（ピア評価） | 経済学部教室 |
| 14 | 修正書評レポートの講評 | 経済学部教室 |
| 15 | 教科書に基づくグループワーク（社会参加） | 経済学部教室 |

11) 「基礎演習Ⅰ」と同様に、2014年度の「基礎演習Ⅱ」のシラバスも和歌山大学HPのシラバス検索から閲覧することが可能である。表2では金川担当の「基礎演習Ⅰ」と同様にシラバスの進捗状況とは若干のずれがあることを付記しておく。

2) 「基礎演習Ⅱ」における図書館の利用状況

資料5をみて明らかな通り、「基礎演習Ⅱ」の授業では初回から5回目の計5回でマルチルーム2を利用した。全15回をマルチルーム2において実施することも検討したが、【3】の2)において述べるように、マルチルーム2などのアクティブラーニングを主目的とした教室の机は可動式であることから机の上で行うグループワークには若干不安定であり、授業後半の選定した文献の検討を行う過程では一般の教室を利用することとした。最終回のグループワークは授業内容としてはマルチルーム2の利用が適当であったが、授業冒頭に映像資料を流す必要があり、設備の面から一般教室の利用に至った。

マルチルーム2を利用した計5回は、いずれもマルチルーム2において主に壁全面のホワイトボードと可動式机椅子を利用した授業内容となっている。

3) 図書館「マルチルーム2」を利用した実際例

①「全面ホワイトボード」に慣れさせる。

【1】3) ①の記述にある「基礎演習Ⅰ」のケースと同様に、「基礎演習Ⅱ」においてもまず学生をマルチルーム2の構造に慣れさせる必要がある。1年次後期に行われる「基礎演習Ⅱ」は1年次前期の「基礎演習Ⅰ」から全てのクラスについて学生のシャッフルが行われるため、「基礎演習Ⅰ」でマルチルーム2を使用したことのない学生が多数存在するためである。

岡田が担当した2013年度「基礎演習Ⅱ」では初回のガイダンスと2回目の自己紹介についてマルチルーム2の構造に慣れさせる作業を行った。初回では学生を1チーム4人のチームを5つ作り、キーワードを連想させるグループワークを行った。まずはじめに出発点となる全チーム共通のキーワードを教員が決め、ホワイトボードの真ん中あたりに書かせ、丸で囲む。次に、共通キーワードから連想されるキーワードを自由に書き、丸で囲んで、出発点の共通キーワードと線で結ぶ。さらに、出てきたキーワードから連想されるキーワードを書いて、というように共通キーワードを出発点として次々にキーワードを広げていくという作業である。

最初のグループワークでは学生にホワイトボードやチームメンバーに対する戸惑いもあるため、できるだけ身近なキーワードとして「和歌山」という共通キーワードから出発させた。身近なキーワードを設定しても、最初のグループワークでは5～60程度のキーワードが限度となる。これでは「全面ホワイトボード」をフル活用していることにならない。そこで、次に共通キーワードを変えて、さらに「一番多くキーワードを出したチームが勝ち」という競争を取り入れる。競争を取り入れると学生にはモチベーションが付与されるため、各チームが100前後のキーワードを出す結果となる。100前後のキーワードを出すと、「全面ホワイトボード」をフル活用することにつながる。このようなグループワークを2～3回行うことで、学生にマルチルーム2の構造に慣れさせるようにした。

2回目の演習では初回で行ったキーワード連想法を用いて自己紹介を行った。出発点となるキーワードに自分の名前を書き、自分から連想されるキーワードを5個程度書きこませる。このようにして出来たキーワード図を前に自己紹介を行わせる。

初回と2回目のキーワード連想法を用いたワークは、いずれも「全面ホワイトボード」を用いた思考方法に慣れさせることを目的としている。また、キーワード連想法を用いることによって、「基礎演習Ⅱ」における学びのなかでも特に「思考をつなげる」ことに結びつけるねらいがある。

②「質問」における方向性を可視化して把握させる。

「基礎演習Ⅱ」において次に「全面ホワイトボード」を活用する場面は、4回目と5回目において行われる「質問」に関するスキルを習得する際に出てくる。

「質問」は「基礎演習Ⅱ」のみならず大学における学びのなかで特に重要なものである。また、学生が社会に出てからも、他者とのコミュニケーションを円滑かつ豊かなものにするために重要なスキルとなる¹²⁾。なかでも特に、「質問」には種類によって方向性があり、的確な方向性をもった質問を使い分けることによってコミュニケーションのあり方がより良いものとなることは留意すべき点である。的確な質問は演習における議論を有効に前進させ、議論が前進した結果としての成果をメンバーが持ち帰ることができるようになる。その意味において、「質問力」をもった学生の存在は「基礎演習」をはじめとする演習系の授業科目において重要と考えられる。

「基礎演習Ⅱ」では、「なぜ」「どうして」といった「原因追求型」の質問と、「どうしたら」「どんな」といった「問題解決型」の質問の違いを説明する際にホワイトボードを利用した。この説明は、もちろん紙ベースのレジユメで説明することも可能である。しかし、全面ホワイトボードを利用して説明することによって、「質問」のもつ方向性の違いを学生はよりよく可視化して実感することができるようになる。「質問」のスキルの重要性を強いメッセージとして学生に伝えることによって、6回目以降の文献に基づいたグループワークにおける議論がより深く充実したものとなった。また、グループワークにおける議論が行き詰まった際には、「質問をしてみなさい」と促すことで議論が前に進むというケースが見られた。このことから、「全面ホワイトボード」を用いて可視化したことによる学習効果が表れていると見ることができる。

③その他の効果

2013年度「基礎演習Ⅱ」における「マルチルーム2」を利用した実際例は①および②の内

12) 「質問」スキルの重要性については「ラーニングスキル演習実施報告」を参照。

容が主であるが、他にも利用するケースとしては少ないながらも重要な点がある。一般的に学生の集中力はそれほど長くは続かないとされている。データにもよるが、15分、30分などの言説が存在する。つまり、少なくとも90分授業の間に数回にわたって学生の集中力は途切れる可能性があるということである。アクティブラーニングは従来の講義スタイルとは異なり、学生をまさにアクティブにすることによって集中力が切れるという問題に対処するという効果がある。この効果をあげるのに「マルチルーム2」の「全面ホワイトボード」はうってつけであるといえる。

学生の集中力が途切れてきたことが見受けられるようになったら、座ってできる作業であったとしても立たせてホワイトボードを使わせることによって対応が可能となる。つまり、「全面ホワイトボード」は「場面の転換」をはかって学生の集中力を新たに持続させるという効果をあげるのに大変有効なのである。「基礎演習Ⅱ」ではこのように「全面ホワイトボード」を活用することで、90分間にわたって学生の集中力を持続させることがある程度可能となった。

[3]「基礎演習」科目における「マルチルーム」利用の長所・課題

以上、【1】では、和歌山大学経済学部「基礎演習Ⅰ」における「マルチルーム2」の利用例を、【2】では、「基礎演習Ⅱ」における「マルチルーム2」の利用例を、それぞれ紹介してきた。現時点でのこれらの振り返りを行っておきたいと思う。

1) マルチルーム2における参加型演習の効果

「マルチルーム2」の壁面ホワイトボードを使い慣れることによって、学生がアイデアを出すのを恐れなくなったとの印象を担当教員は共通して持っている。これらの数値化・客観視が今後の課題であるが、少なくとも通常教室で机に紙（模造紙）を置き同じことをさせても、これほどに自由なアイデアはなかなか出にくいと思う。

また壁面ホワイトボードは、それぞれの学生のアイデアを可視化・共有化しやすいため、他人が書いたものをみてお互いに意見を言い、またそこでアイデアが出てくるという効果もみられた。

また、基礎演習Ⅰでアイデア出しから班報告まで、マルチルーム2で一連して行えたように、椅子が動かし壁面ホワイトボードにパワーポイントスライドを映し出すという作業もできるので、アイデア出しから発表までは一連で行えることもこのマルチルームの強みである。

2) マルチルーム2における参加型演習の課題

マルチルームに書いたアイデアの内容は、他の授業でマルチルームを使用する場合消さ

れてしまうので、来週基礎演習に来て、残っていないということがある。学生はスマホ、教員はカメラでその内容を撮影して次回以降見直しているが、スマートフォンの画面であると、どうしても後で見直してみてもその内容がすべて共有できるわけではないので、次にアイデアがつかないことがある。マルチルームで出たアイデアを、どのように保存・活用し、学生に共有化させるかが、今のところのマルチルーム利用の課題であるといえる。

また、1) で述べたように壁面利用のグループワークという点でマルチルームは一般的な教室に比較して優位性があるが、反面、机を利用したグループワークとなったときに一般的な教室と比較すると使い勝手が悪い側面がある。ただし、この問題点はマルチルーム特有の問題というよりは個別可動式の机を設置した教室に共通してみられる問題点と考えられる¹³⁾。アクティブラーニングをメインの目的とした教室を設置する際には往々にして可動式の机が導入されるが、アクティブラーニングをあらゆる場面についてスムーズに運営させるための重要な点として提起したい。

【付記】

本論文は、和歌山大学教育改革推進事業経費「アクティブラーニングの体系的導入による汎用能力（ジェネリックスキル）の育成事業」（研究代表者：大澤健）の成果の一部である。

なお、基礎演習におけるマルチルームを使用したアクティブラーニングの試みについては、和歌山大学附属図書館の専任教員である岡田大輔特任助教に、数多くのアドバイスを頂いた。記して感謝申し上げます。

【参考文献】

- ・学習技術研究会編 [2006] 『知へのステップ 大学生からのスタディ・スキルズ [改定版]』くろしお出版。
- ・河合塾編 [2010] 『初年次教育でなぜ学生が成長するのか 全国調査からみえてきたこと』東信堂。
- ・日本図書協会図書館利用教育委員会・図書館利用教育ハンドブック学校図書館（高等学校）版作業部会編 [2011] 『問いをつくるスパイラル 考えることから探究学習をはじめよう!』日本図書協会。

13) 和歌山大学経済学部・講義棟2階演習室（E211）においても同じような問題点が見受けられる。なお、個別可動式ではなく、複数人が同時に着席する可動式の机（E209とE210には勾玉型の可動式机が設置されている）の場合には個別可動式の机で見られた問題点はクリアされている。